平成２５年度8020公募研究報告書抄録（選択番号：13-01-03）

研究課題:精神疾患入院患者における行動変容支援型の歯科保健指導方法の確立

研究者名：小山重人[1)]，佐々木啓一[2)]，小関健由[3)]，細川亮一[3)]，小坂健[4)]，相田潤[4)]

所　　属：[1)] 東北大学病院歯科部門顎顔面口腔再建治療部，[2)] 東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野，[3)] 東北大学大学院歯学研究科予防歯科学分野，[4)] 東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野

【目的】精神疾患による入院患者は，口腔ケアの低下また服用薬剤の副作用等により口腔環境が悪化し，さらに歯科基本疾患に留まらず，咀嚼・摂食・嚥下障害を有する可能性があるが，患者の口腔内環境に関する実態は把握されていない．そこで本研究では，精神病院に入院している患者の口腔環境，機能に関する実態調査をまず実施し，次いでその患者を対象に口腔衛生プログラムを実施し，実施後の受診者の口腔環境の向上調査した．

【方法と結果】１．調査は宮城県立精神医療センターにおける入院患者のうち86名とし，口腔健診および口腔機能検査を研究開始時と３ケ月後の２回行った．

２．調査項目及び分析結果

１）分析は東１病棟および東２病棟の入院患者で２回の診査両方に参加したものを対象に行った．年齢（東１病棟：45歳±13，東２病棟：57歳±12），性別（東１病棟：男性9名・女性4名，東２病棟：男性4名・女性2名），入院期間（東１病棟：4019日±4620，東２病棟：1994日±1784）であり，東１病棟および東２病棟に統計的差異は無かった．

２）口腔清掃状態PI，CPI，未処置歯数，現在歯数，欠損補綴歯数，口腔水分量，グミ試験，反復唾液嚥下テストを調査したところ，東１病棟および東２病棟に統計的差異は無かった．

３）歯科教室（口腔衛生プログラム）の実施は，①患者と看護師スタッフ両者（東１病棟），もしくは②患者のみ（東２病棟）の２群に研究開始時と３ケ月後の２回行った．研究開始時，介入３カ月後の調査結果を比較検討したところ，東１病棟において臼歯部PIに１回目と２回目に有意な差が存在した．口腔水分量は，介入前（25.7±4.4），介入後（23.6±7.0）ともメーカー判定基準測定値より低く，口腔内が乾燥状態であることが明らかになった．

【考察】患者現在歯数は15.9歯，CPIは4㎜以上の歯周ポケットを有する者の割合は57.1％と，平成23年度厚労省歯科実態調査結果と比較して悪く，PIも高かったため口腔衛生状況が低下していることが推測された．歯科教室（口腔衛生プログラム）の実施により，入院施設において精神疾患患者およびスタッフに対して健康行動の変容を促したが，調査期間が３カ月と短く，介入の有無による差は認められなかった．今後３カ月後，１年後のデータを収集して，継続的な口腔ケア指導，摂食・嚥下指導教室からなる行動変容支援型の歯科保健指導方法が，精神疾患患者の栄養の維持，生命予後および早期社会復帰において必要なものであることを検証する予定である．